

なかむらや旅館様

いきなりのお手紙で恐縮です。

私は、8年ぶりになかむらや旅館さんをお訊ねさせていただきます。

ずっと以前から、いつかお訊ねして、あの時のお礼を申し上げたいと思っておりました。

8年前私は、梁川工業団地の、とある工場で責任者をしておりました。

忘れもしない、3月11日、頑強な鉄骨のボルトが引きちぎれるほどの強烈な揺れが襲ってきました。そして、それからの日々は想像を超えるものがありました。

電気も水道もストップする中、なんとか出社できる社員を集めて稼働不能になった生産設備を復旧するため全員で奮闘しておりましたが、一夜あけるごとに原発事故の避難区域が10キロずつ拡大して来て、とうとう30キロまで広がってしまいました。アメリカ軍が80キロ範囲までの避難指示を出したと漏れ伝わってきたころから社員に動揺が広がり、目を見るとあきらかに工場復旧どころではないのが判りました。

私はその時、工場の寮に居住していたのですが、朝の最初は近くの小川に水洗トイレの水を汲みに行くところから始まるありさまで、夜も眠れず、自分の日々の生活そのものにも疲れておりました。

当然、社員各自も同様で、私のところにも“どうするんですか！”の声が聞こえ始め復旧がままならないのと合わせ、途方に暮れるばかりで、心身共に降参状態でした。

そんな時です、なかむらや旅館さんが、お風呂を解放してくださっているとの情報を聞いたのは……。お訊ねしたのは、確か3月16日あたりではなかったかと思います。

1週間近くタオルで体を拭くのがせいぜいの中、“お風呂”はなんとも魅力的な響きでした。早速、社員数人で喜々としてお邪魔したのですが、着いてみて驚きました。

なかむらや旅館さんも大きな被害を受けられていて、他人に風呂を提供するどころではない状況だったと記憶しております。

でも、そんな中、若女将さんだったと思いますが、大変さを微塵も感じさせず、大勢の方々に順番にお風呂を提供しておりました。しかも、にこやかに……。

勝手に自分で自分を追い詰めて降参しかかっていた私は、なんか救われるような気持ちになったのを覚えております。

大げさに言えば、“たった一晚のお風呂”が人生を変えることって、あるのですね、湯船で手足を伸ばせる幸せがよくわかりました。その晩は、それまで飲みたい気分が全く出なかったビールを久しぶりに飲んで、ぐっすり眠ることができました。

翌日は、開き直った自分がいました。

全社員集めて、“やるだけやって、あとは成り行き”みたいな、いいかげんな開き直りの話しをしたあたりから、社員の気持ちも落ち着き始め、復旧も軌道に乗ったのを覚えています。

私はその年の秋、新潟に転勤になり、7年間勤務して先年末リタイアいたしました。新潟の雪の中でもそれなりに前向きでやってこられたのも、ひょっとして、あのお風呂のおかげだったのではと思う今日この頃です。

リタイアを機にずっと考えていた、なかむらや旅館さんをお訊ねでき感慨無量です。あの時一緒にお風呂をいただいた仲間にも話したところ、くれぐれも御礼よろしくとのことでした。

以上、とりとめのない手紙で、本当に恐縮です。

なかむらや旅館様の末永いご繁栄と、皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。その節は本当にありがとうございました。

茨城県